

服装によって生起する多面的感情状態の測定
 (第8報) 服装イメージと生起する感情との関係

○華頂短大西原容以 鳴門教育大藤原康晴 奈良女大中川早苗 大阪経済大学本修

目的 前報と同様に4場面別に、それぞれ10種類の服装を着用した時に生起すると思われる感情を、4肯定的感情と3否定的感情による測定尺度を用いて測定し、本報では各提示服装に対する服装イメージ(派手ー地味、フォーマルーカジュアル、ふさわしいーふさわしくない、着たいー着たくない)および場面によって、生起する感情がどのように異なるか検討した。

方法 7つの感情の測定値を従属変数とし、場面と服装イメージの評定を要因として、2元配置分散分析を行い、各要因と感情との関係を考察した。また各服装イメージ間、服装イメージと提示服装間の相関を分析した。

結果 服装イメージと場面によって、生起する感情に差違がみられ、両要因の交互作用も認められた。派手ー地味、フォーマルーカジュアルの評定において、場面による感情の違いは肯定的感情の優越、充実、安らぎ感、否定的感情の圧迫・緊張感で顕著である。各場面で、肯定的感情の充実感、地味またはフォーマルと評定した時により強く生起し、快活・爽快感、優越感、派手またはフォーマルと、安らぎ感、カジュアルと評定した時により強く生起し、否定的感情の羞恥感、派手と、圧迫・緊張感、フォーマルと、また会社訪問の場面で地味と評定した時により強く生起している。ふさわしいーふさわしくない、着たいー着たくないの評定において、肯定的感情はふさわしい、着たいと評定した時に、否定的感情はふさわしくない、着たくないと評定した時により強く生起している。ただし、優越、充実、安らぎ、圧迫・緊張感などは、場面による感情の違いが顕著である。